

正宗白鳥と石川啄木

—書くことへの自意識—

吉田竜也

1

明治四十年代において正宗白鳥はほとんど〈流行作家〉といつてもいい存在だった。『正宗白鳥全集』第三十巻（福武書店、1986・10）の「作品目録」によれば、小説作品だけで明治四十年には十四作品、四十一年には十三作品が『太陽』『中央公論』などといった有力誌に掲載されている。四十二年の新年号には実に五誌に小説を寄稿している。そして四十年九月、第一創作集『紅塵』を刊行して後、矢継ぎ早に小説集を上梓している。

山本芳明は「我々を知る者は我々と同じ若さの人でなければ駄目だ、つまり花袋君や藤村君よりも、白鳥君の方が我々に切実だ」（緩調急調『新声』明40・11）といった言説を紹介し、白鳥が当時の若者の「代弁者となっていた」としている¹。そのような若者の一人に石川啄木を数えることができるかも知れない。

もっとも「正宗白鳥の短編小説集『紅塵』を読み深更にいたる。感概深し、我が心泣かむとす。予は何の日に到らば心静かに筆を執るを得む」（日記、明40・12・28）とあるが、啄木の場合の「感慨」とは一読者として自らの心情を代弁してくれるものと読めるとき、「予は何の日に到らば心静かに筆を執るを得む」というように、自分より先に小説家として名を上げつつある白鳥への「感慨」であるともとれる。啄木は書簡や日記でしばしば白鳥について言及しており、また數度白鳥の元を訪問している。ゆえにこれまで啄木と白鳥との比較という試みはいくつかなされている。両者の交流史と各々に対する言及については齋藤三郎が整理している²。上田博は両者の小説などを詳細に比較検討し、啄木は「時代閉塞の現状」において、ニヒリストイックに物事を眺めるだけに終わる「白鳥文学あるいは白鳥的人間像を批判的に対象化した」と結論する³。比較的最近の論考では、高淑玲が「啄木は情熱を以て運命と戦う意志が、白鳥のただ「人生のかくれた

る消息を伝え」る趣旨とほど遠いので、白鳥のように「心静かに筆を執る」ことは到底できないのである」と論じている。まとめるに、啄木は当初一読者として、さらには小説家志望者として白鳥へ親近性を感じるが、「時代閉塞」に対し冷笑的に振る舞うことに終始する〈消極的な白鳥〉に飽き足らない〈積極的な啄木〉は、やがて白鳥の影響圈から脱していった、ということになる。⁴

〈消極的な白鳥〉、〈積極的な啄木〉という対比は自明なようであり、これ以上の検討は必要ないものと一見とれる。しかし興味深いことは白鳥と啄木がはじめて関わりを持った以下のエピソードである。啄木らが明治三十七年十二月に刊行した『白百合』に対し、白鳥が同誌所収の啄木の詩「天火蓋」を批判した。

石川啄木の天火蓋を読むに、吾人何等の美をも感する能はず。

用語とても甚だ厭ふべきを見る。「恋は天照る日輪のみづから焼けし蟻涙や、こぼれて、地に盲ひし子が冷に閉ぢける胸の戸の夢の隙より入りしもの」の如き、あまりひねくり廻した比喩にて、お説の通りと感服も仕兼ねるなり。詩は必ずしも一読して直に感すべき者のみならず、難句に満つとも又可なるべきも、この詩句のやうにては、考ふれば考ふる程、馬鹿らしくなる也。（白鳥

「新刊雑誌評」「読売新聞」明37・12・9⁵）

白鳥は啄木の詩を、美辞麗句を並べただけで何者をも伝えない、自己目的化した〈詩〉だと批判している。それに対して啄木は「過日所用の序でに日就社を訪ひ、評者正宗白鳥と会見」するが、白鳥は「我

は詩を評するの心なし、今の時、詩人を訓ふべきは克く詩に通ずるのみなるべき也、我的如きたゞ新聞記者たる責任に迫られて止むなく筆を取れるのみ」と答えただけといい、啄木は失望する（以上、姉崎嘲風宛書簡、明37・12・14）。この啄木の抗議について、白鳥側からの言及はない。しかし白鳥がいったという「我は詩を評するの心なし、今の時、詩人を訓ふべきは克く詩に通ずるの人のみ」という言葉は、白鳥「新刊雑誌評」にある「今日の新体詩は専門外の味ふに足る価値なきに基けるなり」という言葉、すなわち新体詩が閉じたサークル内だけでしか流通しないようなものであり、門外漢にとつては何の価値もないものだ、という批判と表裏一体の言葉となっている。さらに注意したいことは、啄木の詩を、ただ大げさな「ひねくり廻した比喩」を羅列しただけで、読者に何も喚起させない〈詩〉であるという白鳥の批判は、後の啄木が「空地を広野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人にした上でなければ、其感じが当時の詩の調子に合はず、又自分で満足することが出来なかつた」（「弓町より食ふべき詩」『東京毎日新聞』明42・11・30～12・7）と、〈新体詩人〉時代を批判的に回顧していることを、先取りしていたということである。

白鳥と啄木の最初の出会いから読み取れることは、一見スレ違いのようでありながら、書くという行為への意識、書かれたものがどのように流通し、効力を發揮していくのかということを両者とも問題とし

て抱えていく、その出発点として重なっているということではないか。

言い換えると、例えば田山花袋が「露骨なる描写」を唱え（明37）、書くことへの参入に人々を誘う一方、書くことに苛まれる人々をまた同時に生み出す時代を、共に生きた者として一人を捉える視点をもたらしているのである。

〈消極的な白鳥〉〈積極的な啄木〉という対立図式は、そのような両者の重なりを見えずらくるのである。さらに白鳥は後年啄木について「啄木の和歌は面白い。在来の和歌の持つてゐるやうな気取りがない」としつつも「しかし、人生観的な感想は、有難味をつけて見れば、大概は意味深く思はれるので、啄木の感想だつて、彼のが非凡な才を抱きながら不遇に死んだがために、価値がついたのである。彼の云つたやうなことは今日の同人雑誌の文学青年だつて云つてゐるのだ」と否定していることが（『追憶』『読売新聞』昭2・6・17）、二人の対立を一層自明視させてしまう。しかし「不遇に死んだがために、価値がついた」という白鳥の物言いは、あるものがなぜ価値を帯びるか、その理由を外在的な点に求めるという意味で、中々に〈啄木的〉な批判・発想の仕方と捉えられないだろうか。本稿では〈消極的な白鳥〉〈積極的な啄木〉というフィルターを一端外し、そこから見えてくる両者の差異と、そして相同性を考察していく。

に新聞社を舞台にしたものが多くある。

「原稿出切」と二面の編輯者は叫んで、両手を伸し息を吐き、やがてゆらり／＼と、ストーブの側へ寄つた。炎々たる火焰の悪どく暑くるしいストーブを煙草の煙で取り捲いて、破れ椅子に座してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの、議会の問題や情夫殺しの消息、明日の雑報の註釈説明批評で賑つてゐる。

「築島君、その女は美人かね。」編輯の岸上が一座の中へ割り込んで問ひを發した。

「実際いゝ女ですよ、青ざめて沈んでる所は可憐です。僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるもの宜しく刑一等を減ずべしだ。」三面の外勤築島は、煤けた顔に愛嬌笑ひをして、表情的に云ふ。

これは白鳥「塵埃」（『趣味』明40・2）の冒頭であるが、啄木の小説「菊地君」（明41・5稿）の中にも「『原稿出切』」と呼ぶ。ト、八戸君も小松君も、卓子から離れて各々自分の椅子を引ずつて暖爐の周邊に集る」という箇所がある。これは些末な例だが、啄木「我等の一团と彼」（明43・5稿）は、「私」が「一体に自分に閑した話は成るべく避けてしない」謎めいた存在である高橋へ興味を抱くことから物語を進展させるという構図となつてお、白鳥「塵埃」における構図——新聞社内において周囲からあたかも超然と距離を置いている存在である小野に対し「予」が興味を抱く——と共通している。

啄木も白鳥も新聞記者であつたという履歴を有するが、両者の小説

の中で「うまい」（日記、明41・7・2）、「正宗真山二氏のはドノ号のもうまい。描写の技倅に於いては、青果氏は当代一、そして正宗氏

に至つては、更に何者か人生のかくれたる消息を伝えてゐる」（日記、明42・1・7）などというように技巧の観点からしばしば称賛している。啄木の小説作法に白鳥からの影響も認められよう。

上田博は「我等の一団と彼」について「（引用者：ニヒリストである）高橋は、視点人物（亀山）によってたえず相対化させられ、しかも〈我等の一団〉との議論の場に引き摺り出されることによつて、思想的特質がたえず発かれていく」という「仕掛け」を指摘し、ここに白鳥的ニヒリズムとの際だつた差異があると論じている。¹⁷確かに啄木はやがて「白鳥氏の作物から享ける感銘の薄くなつた」（暗い穴の中へ明43・秋稿）といつてゐるように、白鳥への関心を失せてしまうが、まずは白鳥「塵埃」「世間並」を例に、白鳥と啄木の差異と相似性を考察していきたい。

「塵埃」は、現在の境遇に不平を抱きつつも、将来への希望を糧に校正係の日々を過ごしている青年「予」を視点人物として、新聞社内の光景と、うだつの上がらない老校正係を描いてゐる。先に引用した冒頭部分で「破れ椅子に座してゐるもの」とあるが、後にある「この籐椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦巻く編輯局の塵埃を吸はねばならぬと、天命の定つてゐるとすれば、未練はない。今日此處で舌を噛んで死んで見せる」という「予」の慷慨と対応してゐる。このよう地の文の端々には登場人物たちを愚の極みとして引きずり下ろそ

うとする「予」の感情が横溢している。

しかし「神經は無くなつたのであらうか、感覺は消滅したのであらうか」というようにあたかも願望や葛藤がないかのようにイメージしていた小野が、「よく原稿にある文句だが、碌々として老ゆるつていふのは先づ私達の事でせう、一体碌々といふ文字は、先生方はどんな意味で遣つてるんか知りませんがね、私は「碌々」の中にはいろんなつらい思ひが打ち込まれてるんだと、独り定めにしてるんです。碌々として老ゆるつて、決して呑気いほんやりして老ゆるんぢやない」というように、「碌々」という一言で表象されてしまうことへの違和感を述べている。また彼が謡曲や能を嗜むことを知り、「予」は驚く。

さらに「予」以外の登場人物の発話からは、「無駄話に笑ひ興じて」でしか生き続けざるを得ない者たちの、諦めと自嘲もまた読み取れる。冒頭引用部に続く箇所で、編集者の一人岸上は「まあお互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の黴菌に生血が吸はれつちまふまで生きているんさ」と述べる。「予」とて「銀座のほこり」を吸つて生きざるをえない者である。「予」は「明年を思ひ明後年を考へれば、想像の糸は己れを中心に、幾百の豊かなる絵画や小説を織り出す。艶麗な景も浮べば、勇壮な潮も湧く」と空想してゐるが、大本泉が正しく述べているように「〈夢〉と実生活とを相關させることなく、夢想世界に沈潜したままの「予」にも、批判すべき対象として白鳥のまなざしは注がれている¹⁸のである。「与も又一日を校正に過ごさねばならぬ。己れには将来があると、心で慰めながら」という言葉でこの小

説は締めくくられるが、この「予」の述懐は、塵埃にまみれた日常生活を送る編集者たちを軽蔑し、高みから見下ろそうとしている「予」も、彼らと同じように埃まみれの生活を「己れには将来がある」と自ら慰めつつ生きるしかない者として自覚しはじめていることを示している。

啄木は「時代閉塞の現状」（明43・8稿）で「我々青年を囲繞する空気は、今やもう少しも流動しなくなつた」と述べているが、「塵埃」という作品空間もまた〈少しも流動しない空氣〉に覆われている。編集者は原稿を完成させ「両手を伸し」ホッと「息を吐」いてストーブにあたりに行くが、ストーブはただ暖かいのではなく「悪どく暑くるしい」。そしてその周りを「煙草の煙」が滞留し続ける。一見活気あるこの社内風景も、「予」にとっては、よどんだ、停滞した空気が瀰漫する空間として捉えられている。築島を描く「煤けた顔」という言葉は、理想を諦め無駄話に憂き身をやつす日々を送る者を描く隠喻でもあろうし、文字通り「塵埃」まみれの顔を現す直喻的な表現とも取りうる。呼吸をしなければ生きられないように、「予」もこの「塵埃」にまみれた空気の中から抜け出すことはできない、という暗示でこの小説は終えられている。啄木の小説の草稿「島田君の書簡」（明42・3稿）に、砲兵工廠から吐き出される黒煙を見た主人公が「劇しい煙毒の為に生物の健康が害はれ、如何なる健康者でも其区域に住んで半年経てば、顔に自ずと血の気が失せて妙に青黒くなり、目が凹んでドンヨリする」などと妄想する場面があり、人間の未来を阻害するもの

として黒煙＝塵埃が表象されている。白鳥も啄木も、汚れ、淀んだ同時代の空気を感じし、未来を阻むものとして表象しているのである。

3

啄木の岩崎正宛書簡に「五日には正宗白鳥君を訪問した。頗るヅキラ棒な人間で虚礼といふものを一切用ゐない。僕は大すきだ、この大将、箱崎町へ淫売を買ひに行くといふので猶更面白い。今月の趣味の「世間並」にその事が書いてある。あの妙な主人公が正宗君の性格そのまんまだ」（明41・7・7）とある。啄木が読んだという白鳥の小説「世間並」（『趣味』明41・7）では、「新奇」な女だけを求め女郎屋通いをし、ある友人と付き合いに飽くと、また別の友人との付き合いを復活させる、そのような日常を生きている「私」が描かれている。「私」の友人の一人である豊島は「うんにや僕はもう方針を変へた、どんな卑屈な真似をしても金を儲けるつもりだ、世の中は俗物ばかりだから、これまでのやうにしちや馬鹿を見るからな、もう主義変更だ」と述べている。しかし豊島はそういった矢先に「筆を剣にして口から焰を吐いて、惰眠を貪つて今の社会を震動さすんだ」と気炎を上げる。それに対して「私」は「少し矛盾だね、さつきにや金儲けの計画をしたぢやないか」と揶揄するが、豊島は「馬鹿云ふな、僕等はこんな薄のろい世に我慢出来んのだ」（傍点引用者）と答える。またある日に豊島は「僕あ食へなけりや放浪する」と言つたり、泥酔して「汗臭い労働者の腕を握り、その硬張つた手の掌に熱涙を濯ぎ、

「僕は君の兄弟。」と叫んで、周囲の客を驚かしたりもする。しかし豊島は「敢へてその好きな放浪無宿の人ともならぬ。手に鶴嘴を持たうともせぬ。私の家によく寝て、よく飲みよく食つてゐる」だけである。

山本芳明は白鳥の小説「独立心」（明40・5）、「何處へ」（明41・1・4）と白鳥の初期評論を論じて、「旧世代の人々のパラダイム、「武士道」「仏教」「基督教」によって自己と世界の安定した関係性を得られた青年たちが、新たなパラダイム、新たなアイデンティティの確立を求めて彷徨（或は咆哮）している状態として「空想ニ煩悶」する青年たちの姿をとらえている¹⁰と述べているが、「世間並」においては「新たなパラダイム」として「金を儲ける」ことに加えて、岩野泡鳴的な「放浪」や、社会主義が取り上げられている。しかし豊島も「私も結局はそのような「新たなパラダイム」に参入せず、それどころか作中では相対視すらされている。

豊島にしろ「私」にしろ、後の啄木がものした批判の射程に入っていることに注目したい。啄木は「時代閉塞の現状」で、「正義だの、人道だのといふ事にはお構ひなしに一生懸命儲けなければならぬ。國の為なんて考へる暇があるものか！」といった「実業界などに志す一部の青年」の言い草を採り上げて「それは一見彼の強権を敵としてゐるやうであるけれども、さうではない。（略）強権の存在に対しても全く没交渉なのである」とする。啄木は岩野泡鳴が缶詰工場を作るため権太へ渡ったこと（明42）について「高い処から跳下りる気持」

と言つた泡鳴氏に対する、強い同感の念」を覚え、同時に「その時から、私が白鳥氏の作物から享ける感銘の薄くなつた事」が「著しく感じられた」という（「暗い穴の中へ」）。しかしそのような泡鳴の「实行」とて、資本主義に繰り込まれることに他ならないのである。「暗い穴の中へ」では泡鳴への「同感の念」を、あくまで過去のものであつたと語つていて注意しておきたい。

また「時代閉塞の現状」で「今日の小説や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫売買、乃至野合、姦通の記録であるのは偶然ではない」と述べている。啄木がいうように、そのほとんどが「国法によつて公認、若くは半ば公認されてゐる」のだから、「女郎買」云々は一見既存の道徳に対する「反抗」であるようでありながら、既成の枠組みを出るものではない。言い換えると「金を儲ける」ことも「女郎買」も國家のイデオロギー装置の一部であり、知らぬうちに豊島も「私」も、あるいは泡鳴の振る舞いも、制度の延命に寄与しているということになる。

では「世間並」の結末はどうなるか。豊島にも飽いた「私」はまた別の友人と付き合いを復活させるが、その友人にも飽き、そしてこの小説は「只一回に豊島に会ひたくなつた。彼の濡んだ目を見たい、彼の情熱の言葉を聞きたい」と結ばれる。「新奇」を求める続ける「私」は、このような円環を出ることはできないということが暗示されているのである。啄木は先に引いた書簡で「あの妙な主人公が正宗君の性格そのまんまだ」と述べているが、小山内薰は「作中に現はれ

て居る所の人生觀は、正宗氏自身の人生觀ではあるが、それが作者の人生觀とならず、うまく客觀化されて、眞実に作中人物の人生觀と思へる」と述べている。¹¹ 啄木は「私」＝白鳥と讀んでいるが、小山内は、「新奇」を求めるという堂々巡りを知らぬうちにしている「私」が、作中では作者によつて相對化されているという様相を捉えているといえる。

しかし興味深いことは、「只「珍しいの」「新奇なの」を待ち設けては、乾き行く心を湿ほさうとするに過ぎぬ」、「凡てが煩はしい」、「明日の私はどうなるか、今の私はこんな風で死運の来るまで生きてゐる」……そんな〈少しも流動しない空氣〉の中を生きる「私」が見た夢だ。兄は被頬して汗ばんだ手で畑を耕し、私は弟と紙鳶を飛ばした。風箏が静かな空に気持ちよく鳴つて、赤い絵具で塗つた紙鳶の影は小さくなる。私は興に乗つて畑を踏み丘へ上り四方へ駆り廻ると、弟は後ろから喘ぎ／＼追て來る。やがて私は手に纏うた糸を有る限り手繰り出したが、運悪く糸は木の枝に引掛つて如何にするも離れない。その間に紙鳶は糸を切つてフワ／＼空を飛んで行く。私も弟も兄も仰向いてその行衛を眺めた。

それはあたかも日常生活に倦み疲れた少年に「見よ、今日も、かの蒼空に／＼飛行機の高く飛べるを。」（『飛行機』明44・6）と呼びかけている、啄木の詩に通じている。「世間並」の「私」もこの停滞する空氣からの飛翔を夢見ているのである。

4

あたりを漂う〈塵埃〉が〈薄のろく〉停滞しているように、少しも流動しない現實への違和と、そこからの脱却への希求が啄木と白鳥の言説から看取される。しかし白鳥の小説においては、停滞する現實から脱却しようと、次々と「新奇」なものを追い求め続けることは、結局は閉じられた円環を生きることに他ならない、という形で描かれている。啄木は「硝子窓」（『新小説』明43・6）で「「何か面白い事は無いか。」さう言つて街々を的もなく探し廻る代わりに、私はこれから、「何うしたら面白くなるだらう。」といふ事を、眞面目に考へて見たいと思ふ」と述べている。この言は特に白鳥を名指したものではないが、上田博は「「何か面白い事」にぶつかるべく、「街々を的もなく探し廻る」若い文学者の一人に、白鳥は確實に加わっていなければならぬ」と指摘している。¹² しかし白鳥の小説とは「「何か面白い事は無いか。」さう言つて街々を的もなく探し廻る」者を批判的なまなざしで捉えた小説であり、むしろ啄木と問題設定を共有している。さらに啄木自身の言説から「何うしたら面白くなる」か、という具体的な方途は見出し難く、力点が置かれていることは「何うしたら面白くなる」か、この停滞した現實を如何に生きるべきか、という問い合わせして同時代的に流通した〈解答〉への、根底的な批判なのではないか。そのような問題は「時代閉塞の現状」において全面的に追求されている。

周知のように「時代閉塞の現状」は、魚住折蘆「自己主張の思想としての自然主義」（『東京朝日新聞』明43・8・23）に触発された形で書かれたものである。折蘆は「オーソリティ」に対抗するために「観照」と「実行（自己主張）」という二律背反するものが自然主義といふ名の下に結合したのだとしている。それへの啄木の批判とは、第一に自然主義を唱える誰もが「オーソリティ」「国家」を敵としてみなしたことではない、ということであり、第二に觀照を旨とする自然主義は、実行を言いだし、理論としての整合性を失つたが、にもかかわらず自然主義という理論の内実は問われずに、「「自然主義」といふ名」は「最初から余りにオオソライズして考へ」られている、ということに対してだ。つまり自然主義というタームが、ただ標語として流通しているのみだという現状を看過してはいけないとしている。

啄木はかつて自然主義を評して以下のように述べていた。

議論の時代は既に過ぎた、これからは実行の時代であるといふやうな議論は、凡て物を速断して後で言ひ直す人の口か、然らずば既に思想上の行き詰まりに達して更に一躍する必要を感じずにある一種の落伍者の口からのみ出るべきものである。又世には、自然主義が衰微しかけたとか、非自然主義の議論はすべて時代遅れだとかいふ風な事を公言する人もあるが、我々は決してさういふ膚浅、且つ不謹慎、且つ不聰明な言に耳を取すべきでない。

（「一年間の回顧」『スバル』明43・1）

啄木は「時代閉塞の現状」において、自然主義に対し「厳密なる檢

覈」がなされることの必要性を再三説いているが、それは上に挙げたように連続した志向性としてある。

一時は肯定的に捉えていた自然主義だが、啄木は自然主義を捨て、社会主義（無政府主義）的な実践へと志向性をシフトしたと多くの論者には目されている。しかし「時代閉塞の現状」において、啄木は「三つの失敗」を挙げているが、高山樗牛の過去の「偶像」への帰依、綱島梁川の臨死体験とその神秘化に比して、自然主義は啄木の記述の中では特権化されている。「此経験は、前の二つの経験にも増して重大なる教訓を与へてゐる。それは外ではない。「一切の美しき理想は皆虚偽である！」」というようだ。啄木は田山花袋を評して以下のよう述べている。

（引用者：花袋の意図は）作物より虚偽及び不確実——厳密なる経験及び觀察（間接経験）に基かざる想像（略）——を排除しようといふのであらう。これを其物の精神から言へば、凡ての作物は、吾人が実際上の経験から得る「人生の帰結に対する予想——予感、暗示」以上の、或は以外の事を表現しよう（略）とする虚偽に陥つてはならぬといふ事であらう。（「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」『スバル』明42・12）

こういった花袋の「ありのまゝ」という主張への共感は、啄木の詩論、歌論を参照すると分かりやすい。啄木は自らの詩作という営為を回想し、以下のように述べている。

自分で其頃（引用者：啄木十七・八歳（二十三歳）の詩作上の

態度を振返つて見て、一つ言ひたい事がある。それは、実感を詩に歌ふまでには、随分煩瑣な手続きを要したといふ事である。譬へば、一寸した空地に高さ一丈位の木が立つてゐて、それに日があたつてゐるのを見て或る感じを得たとすれば、空地を広野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人とした上でなければ、其感じが当時の詩の調子に合はず、又自分でも満足する事が出来なかつた。(略) 私が詩作上に慣用した空想化の手続が、私のあらゆる事に対する態度を侵してゐた時であつた。空想化する事なしには何事も考へられぬやうになつてゐた。(『弓町より食ふべき詩』)

啄木のいう「詩の調子」とは、花袋が排すべきと主張した「鍔」つまり「技巧」(『露骨なる描写』『太陽』明37・2)とほぼイコールに対応している。そして「当時の詩の調子」に従うことは、詩という約束事だけが「実感」を置き去りにしたままの、自動化された記述を生むことしかもたらさなかつたとしている。また詩作のために「空想化する事」が彼の「考へ」を規定してしまうことへの違和感を述べている。ここで啄木は形式と内容という問題、あるいは書くことと認識することとの相互関係という問題に直面している。これらの問題が先鋭的に現れるのは、定型という問題設定を孕まざるをえない、短歌というジャンルにおいてである。

我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然

『東京朝日新聞』明43・12・10～20)

坪井秀人は啄木の短歌の三行分かち書きについて「詠む॥うたうパロールとしての詩(短歌)」に対し「書かれたもの(エクリチュール)としての詩」を意識させるものだったとしているが¹⁴、啄木の上記評論に通底しているのは、書くことと書かれたものに対する強固な意識である。例えば「今まで現実の我れとして筆執りつゝありし我れが、はつと思ふ刹那に、忽ち天地の奥なる実在と化りたるの意識、我は没して神みづからが現に筆を執りつゝありと感じたる」(『予が見人の実験』『新人』明38・7)……という綱島梁川のようない「現実」の、物理的な行為としての書くことを空想的に乗り越えてしまうことを排しようというのである。

そして白鳥もまた花袋的影響圏にあったものと考えられる。つまり「ありのまゝ」に書け、という当為が、むしろ書くことの不可能性を自覚させ、書くことと書かれたものへの問題意識を生じさせたのである¹⁵。白鳥同様、啄木にとっての自然主義受容がもたらしたことは、言葉そのものへの問い合わせだったのである。

「時代閉塞の現状」は「私の文学に求むる所は批評である」という言葉で締めくくられているが、この評論は言葉が標語のレベルで流通し、屋上屋を架すように言葉が乱費される様への批判であることを見逃すべきではないだろう。

5

そのように見れば、「大逆事件」についての貴重な記録と評価される「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帶現象」（明44・1稿）に対しても別の評価が要請される。

このノートは当時の新聞記事（『東京朝日新聞』が中心）の切り抜き、及びそれに対する啄木の注釈からなっている。新聞記事の切り抜き、というのが重要である。人はメディアを通してでしかこの「事件」の様相を知ることができないからだ。

本件は最初社会主義者の陰謀と称せられ、やがて東京朝日新聞、読売新聞等二三の新聞によりて、時にその本来の意味に、時に社会主義と同義に、時に社会主義中の過激なる分子てふ意味に於て無政府主義なる語用ゐらるるに至り、後検事総長の発表したる本件犯罪摘要によりて無政府主義の名初めて知られたりと雖も、社会主義、無政府主義の二語の全く没常識的に混用せられたること延いて本件の最後に至れり。（略）社会主義とは啻に富豪、官権に反抗するのみならず、国家を無視し、皇室を倒さんとする恐るべき思想なりとの概念を一般民衆の間に流布せしめたるは、主と

してその罪無智且つ不謹慎なる新聞紙及び其の記者に帰すべし。島村輝はこういった啄木の言説について「〈社会主義〉の禍々しいイメージを自らつくり上げていった新聞報道のメカニズムに対する、インサイダーの立場からの鋭く自覺的な批判」であつたとするが、注意したいのは、ここでも啄木は「概念」の混乱を指摘しているということだ。理論が差異性を失つて流通していること、そしてその混乱の発生源と責任の所在を問うている。

いくつか例を挙げたい。拘引された「一介の活版職工」「福田武三郎」が如何にしてこの「主義」に近づいたかを伝聞の形で紹介している記事が引用されている。「吾々は万の研究を了へた結果社会主義に來たものでない、只社会主義に偶然出会つたら、氣骨のある連中が比較的立派な説を正直に唱へて運動して居る、之が吾々と意氣が一時投合したから暫時御仲間入りをして檄語を放つたのに過ぎない」と、その「主義」に近づいた偶然性を記事は強調している。のみならず「下宿に在つても酒煙草を飲まず只一回ビールを飲みて酩酊し其夜吉原へ遊びし事あり」と、人格像を描写し、ことの因果を個人の資質に還元させるような記述がこの記事においてなされている。

「菅野すが子」を紹介する記事では「被告中の紅一点」という見出しをつけ、「多少の「文字ある女」に能くある慣として、すが子は沢山の男にも関係したし、多くの文学的書籍にも読み耽つた」と、その「経歴」を記している。同時代流通していた「堕落女学生物語」を解釈コードとして喚起しうる記述である。このように容易にイメージ化

させる記述¹⁷に啄木は、「「被告中の紅一点」の一項は松崎天民君の筆」と固有名を提示している。ここから、イメージ発生の起源と、その責任は明確化される。

この新聞の切り抜き及び注釈によって成り立つノートは、流通する言葉を分節—分析しており、それ自身で言説批判たりうる。外在的な言葉そのものを、透明ではない、決して自明のものではない〈言葉〉そのものを啄木は一貫して問題化していたのである。

白鳥は「大逆事件」より以前、以下のように述べていた。

自然主義と云ふ文字を流行させたのは新聞の力だが、この主義を誤解させたのも新聞だ。雑誌だと攻撃にしても賛成にしても、多少の智識を有つて議論を立てるのだから、従つて酷い無茶苦茶も少ないが、新聞にも些しの智識もなくして議論してゐるのが多い。雑報になると全く無意味にこの文字を悪用してゐる。啻に自然主義ばかりではない、社会主義でも無政府主義でも、新聞によつて世人の解釈を誤らせてゐる。(『新聞と文学』『文章世界』明41・8)

このように啄木と近しいことを述べていたのは興味深い。「大逆事件」下の白鳥は「危険人物」(明44・2)という小説で、刑事に尾行された小説家を描いていたが、同年同月に発表された「他所の恋」(明44・2)という小説では、同じ下宿の中で進行している恋をめぐる出来事について、同宿人たちが語る噂や不確かな証言の渦に巻き込まれるが、恋そのものを巡る出来事に言説によって漸近はすれども、

事態そのものには至りえないという様相を描いている。この時期白鳥はしきりに書けない、知りえないという言葉を連呼しており、小説「盲目」(明43・10)で言葉とその流通をめぐる了解事項を懷疑していることを踏まえると、「他所の恋」は言説としての「大逆事件」を白鳥なりに戯画化した作品であると捉えられる。¹⁸

啄木の死より大分後に、白鳥は次のように述べている。

人間、生命の息を断つと、最早生存競争の範囲を脱するため、憐憫を寄せられる。ことに夭死すると過分の同情を寄せられる。

啄木は特異の歌人であつたに違いない。人間の生存苦を直截に歌つた歌人として、近代無比であるかも知れない。しかし、それは幾首かの和歌について云はるべきことで、その他の創作や隨筆に幾千の価値があるのであらう。私は、今卷頭(引用者:改造社版円本)の『雲は天才である』の一篇と、二三の論文を読んで、年齢相応の幼稚さを認めた。厳めしい服装で現れると大した人間でないものも、痴者の目には偉人として映る如く、膨大な円本の形を取つて麗々しく世に現れると、愚かな読者は有難がるのであらう。(略)土岐君曰く、「啄木は不遇である。」と。しかしこの名譽ある円本に、倨然として一冊を占領して、書簡から雑文の端くれまでも網羅し尽くされたことを円本に一ページも加ることの出来ない幾十幾百の明治大正の作家が見たなら、「啄木は何といふ幸運兒であるか。」と思ふであらう。(『文學者と「不遇」』『讀売新聞』昭3・8・5)

その論点の可否（啄木への評価・受容のありよう）についての考察は別にせねばなるまいが、ここでメディアの機制によってある作家・作品が価値づけられるという視点をとっているのは示唆的である。啄木の「大逆事件」下における〈言説分析〉とも通じるし、また白鳥が明治四十年代に書いたこととも通底している。言い換えると、啄木が自然主義や「大逆事件」をめぐる言説に対し分節―分析を施したように、白鳥は席卷しつつある啄木神話を、円本というモノをコードにして相対化してみせたのである。〈積極的な啄木〉〈消極的な白鳥〉という見方は自明のようでありながら、どちらも言葉とその機能を視野に入れているという点で、実は近い位相にあつたといえる。

「自然主義の全き止揚」「プロレタリア文学へのはるかな示唆」¹⁹という啄木への評価も、「偉人英雄に、われら月並みなる人間の顔を見附けて喜ぶ趣味が僕にはわからない」という白鳥的発想への批判も、射程の広い論点である。しかし一方でそのような評価が隠蔽するのは、啄木も白鳥も物理的な行為としての書くこと、書かれたものの流通とそれがもたらす効果という問題に直面し、そこから発想し続けたということなのである。

注
 1 山本芳明「空想ニ煩悶」する青年——「独立心」・「何處へ」を軸として 正宗白鳥ノート¹（『学習院大学文学部研究年報』33、1987・3）
 2 齋藤三郎「正宗白鳥と啄木」（文献石川啄木）青磁社、昭17・2
 3 上田博「啄木と白鳥——自然主義との交差」（『石川啄木の文学』桜楓社、1988・4）

4 高淑玲「啄木と白鳥——自然主義小説をめぐって」（安田女子大学『国語国文論集』第32号、2002・1）。また伊藤典文は「時代の憂鬱」を共有した者として白鳥と啄木を捉え、明治四十二年という時期は両者が「最も近づき、かつ反発するという臨界点」であったとし、両者の距離が開いていくまでを詳細に考察している。（時代の憂鬱 正宗白鳥と啄木 明治四二（一九〇九）年一〇月一五日を基軸に）
 5 この「新刊雑誌評」（署名は「時評子」）は福武書店版『正宗白鳥全集』には収録されていない。齊藤（注2）、上田（注3）はこの文章を白鳥のものとしている。本稿でも「新刊雑誌評」にある「今日の新体詩は専門外の味ふに足る価値なきに基づけるなり」という言と、「我新体詩の詩人仲間で上手だとか下手だとかいつてゐる丈で恐らくは一般読書社会に面白がつて朗読するものは少なからぬ」（現代の新体詩人）『読売新聞』明36・8・16、署名は「白鳥」などという主張が似通っているため、「新刊雑誌評」も白鳥の手になるものであると見なす。

6 「小柄でかぼそいところ、向ふ意氣の強いところ、皮肉でツケヅケものをいふところ、ニヒリストイックな物の觀方、さういつたところに、この両者（引用者：啄木と白鳥）共通の類似点があるやうに思へてならない」と齊藤三郎（注2）が述べているのは、具体例が示されてはいないにせよ、示唆的である。ところでこの白鳥の啄木評に対する「余りに超時代的な独斷」（武野藤介「正宗氏の啄木評」『時事新報』昭2・6・23、24）という批判がある。

7 上田博、注3と同。
 8 大本泉「正宗白鳥『塵埃』論——給与生活者の悲哀」（『近代の文学』井上百合子先生記念論集）1993・8
 9 日本近代文学における煙突やそこから吐き出される黒煙のイメージについては、木股知史「『イメージ』の近代日本文学誌」（双文社出版、1988・10）を参照。
 山本芳明、注1と同。
 小山内薰「最近の小説壇」（『新潮』明41・8）
 上田博、注3と同。
 「何うしたら面白くなる」か、という啄木の問題設定から導き出されるのは、社会主義、無政府主義への関心へということになるだろう。もっとも、啄木が社会主義者（ないし無政府主義者）であったか否かという問題において、膨大な先行研究が明らかにしていることは、結局は啄木の早世により、このような問題に解決をみることの困難である。ゆえに問題とすべきことは、現存している啄木のテクストを如何に読むか、ということになる。言い換えると、啄木が描いた（であろう）「何うしたら面白くなる」か、その方途を夢想することには、必然的にアポリアがつきまとふ。

14 坪井秀人「近代詩の縫い目——口語自由詩の時代」（『声の祝祭』名古屋大学出版会、1997・8）

15 摂稿「〈書けない〉小説家——正宗白鳥の『盲目』」『国語と国文学』2005・8

16 島村輝「社会主義者捕縛」から「逆徒の死骸引取」まで——「大逆事件」と〈死〉の言説構制」『文学』1994・夏

17 内藤千珠子は一連の管野についての報道で「無政府主義」の女がジェンダー構造の逸脱と乱交するセクシユアリティとにおいて表象されている」とし、この記事について「無政府主義」のスキャンダルの主人公として選ばれた管野須賀子とう記号を、メディアは、悪意と殺意を好奇心に貼り合わせて真近から観察し、物語に奉仕させるべく表象させようとした」と論じている（『天皇と暗殺』『帝国と暗殺ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』新曜社、2005・10）。

18 「盲目」については拙稿「〈書けない〉小説家」（注15）で、「大逆事件」と白鳥との関わりについては拙稿「正宗白鳥と政治——文学者の政治参加と〈大逆〉」（『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』11号—2、2004・3）で論じたことがある。

19 唐木順三「啄木の自然主義批判とその止揚」『現代日本文学序説』春陽堂、昭7・10

20 小林秀雄「作家の顔」『読売新聞』昭11・1・24、25。周知のようにこの小林の言は、白鳥のトルストイ評への批判の中で発した言葉であるが、いかにも〈白鳥らしい〉認識を表すものとして数多言及されているので、ここに掲げる。